

---

# 不思議なヘッドフォン

HERON

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議なヘッドフォン

### 【著者】

N2616D

### 【作者名】

HEROZ

### 【あらすじ】

「カードもややかに」下校中にヘッドフォンをつけていた男を不思議に思っている男の話。

「ここは」普通の高校で「」普通の教室。でも、不思議なことが一つだけある。なぜか窓にいつもヘッドフォンがかかってる。持ち主だって変な奴でもなんでもない。休み時間は普通にワイワイと友達と喋ってる。普通に明るい奴だ。

不思議だ……不思議すぎる……なんでそんな奴が、下校のときはMDにもIPadにも携帯にもコードをささず、ただヘッドフォンだけつけて下校してるんだ……そいつを知らない奴から見たら真性の変人ではないか……

かという俺も喋ったこともないんだよなあ……喋れば喋れそうだけど、あまりにもヘッドフォンから頭が離れず嫌われそうだしな。てか、なんで他の奴は気にしないでいられるんだ。俺って精神力足らんのかな……精神力あるほうだと思うんだが気のせいなのか……おっと話がそれてきた！ 話を戻せ俺。

とにかく、もう我慢ならない。聞いてやる。聞いてやるぞ俺。なんか決心すると妙にテンションがあがってきやがった。今ならいける！

「ちょっと」めん。聞きたいことあるんだけどいいかな？

よし。聞いた聞いたぞ俺。頼む、無視だけはやめてくれよ……

「ん？ 何……なんですか？」

友達だと思ってたが、実は初対面の人だったから言葉の言い直しか。なんだか壁が見えてくるぜ……でも今はそんなの関係ねえ。俺

の体が聞けつて命令してんだから逆らつわけにはいかねえんだ。

「あの、ずっと前から気になつてたんですが、なんで恋こへッドフオンをかけてあるんですか?」

聞いた。やつと聞いた。達成感MAXだ。この達成感は、ドラクエで、はぐれメタルを初めて倒したときよりもあるな。

でも、周りの空気がやばいな……タブーに触れやがつたこいつ。みたいな顔をしながら俺を見てやがる。まあ、これは承知の上だ。それよりも、大事なのは相手の反応だ。わあ、どう言葉を返す。

「えつ。もしかして興味ある?」

おっ。以外に上々な反応。周囲もビックリつてか。

「実は、ずっと前からそれが不思議で不思議でたまらなかつたんですけど」

「やうかあ。まあ、いつか言われると思つてた。じゃあ下校の時に教えるよ」

よし。俺は危険なギャンブルに勝つた。周りを見てもやうだ。さつきまで冷たい視線だったみんなが、今や羨みの視線に変わつている。それに、なんだか壁が無くなつたように思えるぞ。零石一鳥つて感じだな。なんだか本氣で楽しみになつてきた。今日は間違いなくハッピーテーだ。

ヤバい。楽しみで授業に集中できない。俺に当てるなよ頼むぜ先生。

「よし。じゃあここ海原。和訳してみる」

「見てください。この雲を。毎日、形が変わつてゐるじゃない。雲は結構變化されるんだよな……あるあるだよね。」

「見てください。この雲を。毎日、形が変わつてゐるじゃない。雲は日々変化してくるのです」

かつつかつか。ここじゃ普通は出来ない場面だな。俺は出来ちゃうんだよね。

さて、授業も終わつた。かつたるい終礼も終わつた。となると残すは最大のビッグイベント。謎の「一ノ瀬なしへットフォンの謎を残すのみだ。おつ。早速向こいつからこいつへ来てくれたぞ。

「いわん。ちよつと遅くなつた。じゃあ早速外へ出ようか」

「こよによか。なんか緊張してきたな。廊下が長く感じじるぜ……」

「ほれ。これつけてみ。多分驚くよ?」

外に出ていきなりやう言されて、ヘッドフォンを手渡されたわけだが、驚くなんていわれたらハードル上がつたな。これで滅多なことじや驚かないが果たして結果は……

「わ。なんだこれ。風の音や車や電車の音。鳥の鳴き声。外で話してゐる人達の話し声。子どもがはしゃいでいる足音や笑い声。いつも俺が聴いている音と何にも変わらない日常の音。でもなんでだろう。すげえ心地好い。なんでヘッドフォンからこんな音が聴こえてくるのかなんてどうでもいい。こんなに心地好いもんだったつけか日常の音つて。

「なつ！？ 驚いただろ？」

「ああ。驚いた。初めはなんでヘッドフォンからこんな音が流れるのか不思議だつたけど、今はなんでいつも聴いてる日常の音が心地よく感じるのかのほうが不思議だよ」

本当に不思議だ。別にヘッドフォンからどんな音が流れたって今の時代不思議じゃない。でも、こつもは雑音でしかない音がなんで……

「俺もそれはわからんよ。でも、日常の音つて毎日変化してるんだよな。風の音一つとっても、こつもは同じような音でも、ちゃんと聴いてみると微妙に変化してる。それが楽しくて毎日聴いてるんだ。やっぱり変かな？」

「変じやないや。なんか俺もまつちゃんこそつながらいだぜ。毎日変化する音楽だろ？ 最高じゃん」

やういや、日常の音なんてちゃんと聴こいつなんでしたことなかつたなあ。確かに波の音とか綺麗な音だよなあ。ひょつとこわからそうこうどこにも耳を傾けてみようかな。

「やうやくしてくれる」と嬉しこな。そうだ。今日これからしてやんよ

えつ。かしてくれんのか。でも悪いよなあ……

「いいのか？ 大事なもんだろこれ？」

「いいよ。初めて共感してくれる人も見つけたしな。記念だ記念ー！」

おこおこ。そりゃ多分……

「じゃあお言葉に甘えて借りるわ。記念だしな！ それによお。初めて共感してくれた人って言うけど、俺以外にも共感してくれる人いっぱいいると思うぜ。この話を広めたら行列が出来るな。俺が言うんだから間違い無しだー。金とつても並ぶけどな俺は」

「そりや言いちぎだと思ひ乍ら、なんかありがとな。もうなんか友達だな俺達！」

そう言つと握手を求めてきた。なんか感動の瞬間！？ 俺は当然、握手に答えたわ。話やすいし」「んないものまでかしてくれたし、拒否する理由全くなしだ。

そんで俺達は帰り道が違うので途中で別れた。当然俺は日常の音が聴こえるヘッドフォンをつけて帰った。なんかいつもよりも気分良く帰れた。

子どもの笑い声や風の音。鳥の鳴き声に癒された。外で話している人たちの会話で笑つたり、共感したりした。これも明日になるとまた変わってるんだろ。同じような日常でも変化してるんだな。

俺だつてそうだ。いつもは毎日学校に行つて学校から帰つて家でゴロゴロする。休みの日は、バイトに行くか何か買いに行くか、友達と遊ぶか。それくらいしかない。でも、学校でだつて話す内容も勉強する内容も違つ。家でも、見るTVも違つし、家族と話す話の内容も違つ。バイトも、買い物も、遊ぶときもそう。俺はいつも同じような日常でつまらないとか思つてた。でも、よく考えてみれば違つじやん。俺だつて変化してるんじやん。

日常に耳を傾けるつてのは大事なことなんだな。毎日、色々な変

化に。そして、自分の変化にも気づけるんだから。

(後書き)

変化なんて本当に気づかないものです。でも、当たり前の話かもしれません、間違いなく変化はしてるんです。毎日同じ出来事が起こるわけではないんですし。

でも、同じような日常が嫌で、何か違うことをしたくなるときもある。そういう感覚もあつたりします。不思議だなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2616d/>

---

不思議なヘッドフォン

2010年10月26日14時55分発行